

平成21年3月31日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2005～2008

課題番号：17320067

研究課題名（和文） 統合的レキシコン理論の開発と言語学教育への応用研究

研究課題名（英文） An Integrated Theory of the Lexicon and Its Application to the Teaching of Linguistics

研究代表者

影山 太郎 (KAGEYAMA TARO)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：80068288

研究成果の概要：日本語と英語の動詞を中心に名詞、形容詞、副詞、前置詞が用いられる統語構造・形態構造がそれらの語彙的意味とどのように対応するかを結果構文、中間構文、受身文、複合語、派生語など多様な現象について考察し、語彙概念構造とクオリア構造を一体化することによって、形態・意味・統語を包括した総合的なレキシコンの理論を提示した。更に、そこから得られた理論的成果を大学上級学年から大学院の言語学所学者に平易に解説し、言語分析の手助けとなる概説書を上梓した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成17年度	4,800,000円	0円	4,800,000円
平成18年度	3,400,000円	0円	3,400,000円
平成19年度	3,400,000円	1,020,000円	4,420,000円
平成20年度	3,000,000円	900,000円	3,900,000円
年度			
総計	14,600,000円	1,920,000円	16,520,000円

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：人文学・言語学

キーワード：レキシコン、形態論、辞書的意味、語彙情報、構文、語彙概念構造、クオリア構造

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、『語彙の構造』(1980年、市河賞)、『文法と語形成』(1994年、金田一賞)、『動詞意味論』(1996年)、『語形成と概念構造』(1997年、共著)、『形態論と意味』(1999年)、『ケジメのない日本語』(2002年)などの研究書および国内外の専門誌における論文において、日本語および英語の動詞語彙を中心に意味構造と統語構造・形態構造との関係を解明してきた。

(2) これらの個人研究と並行して、1993年か

らは「関西レキシコンプロジェクト (KLP)」と称する語彙とレキシコンに関する研究会を主宰し、この研究グループを中心にして、平成10年度～12年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「日英語コーパスに基づく統合的レキシコン理論の開発」(課題番号10610524、研究代表者 影山太郎)、平成14年度～16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「形態・意味・統語を包括する統合的語彙理論の構築」(課題番号14310225、研究代表者 影山太郎)で研究を進めてきた。

2. 研究の目的

- (1) 上記の平成 14-16 年度基盤研究 (B) (1) 「形態・意味・統語を包括する統合的語彙理論の構築」を発展・充実させてレキシコン理論の最終的な形を整え、意味論・形態論・統語論・語用論に関わる語彙情報を総合的に捉えることによって、日本語から海外に発信できる総合的なレキシコン理論を開発する。
- (2) 加えて、理論開発から得られた知見を言語学教育に応用するという社会貢献を付随的な目的として想定する。

3. 研究の方法

- (1) 研究代表者および研究分担者（研究連携者）の個人研究をベースにして、関西レキシコンプロジェクトの研究例会を基本的に月一回開いて研究発表を行い、批判的検討を行った。また、この研究集会では随時、他大学の研究者を招聘し、研究交流を図った。
- (2) 上記研究例会での発表を発展させたものを、国内だけでなく、アメリカ、イギリス、ギリシア、ドイツ、フランス等の専門誌・論文集および学会・国際集会で発表した。
- (3) 2007 年 9 月に中国・北京大学で開かれた「2007 中日理論言語学研究国際フォーラム」で研究代表者が基調講演を、二人の研究分担者が研究発表を行った。
- (4) 理論研究を初年度から行ったのに対して、二年目からは成果の言語学教育への応用として概説書の執筆を決め、関西レキシコンプロジェクトの研究例会で毎月、原稿のチェックを行った。

4. 研究成果

本研究課題では従来見逃されてきた現象について多数のデータを発掘し、理論的分析を行ったが、項目にまとめると次の 5 点に集約される。

- (1) レキシコンにおける意味表示の画定。結果構文、中間構文、移動動詞構文、擬態語動詞などを中心にして、従来あいまいにされてきた語彙の意味と構文の意味、語用論の意味の区別を明確化し、語彙の意味構造が統語構文から受ける作用や、語用論的知識が辞書に慣習化される条件などを、語彙概念構造とクオリア構造を融合させることによって明らかにした。
- (2) 出来事と属性の叙述機能の解明。従来、構文的ないし語用論的な性質と見なされる傾向にあった属性の叙述と出来事の叙述の相違を、受身文、再帰構文、目的語省略構文、動作主複合語など多数の現象によって明らかにした。
- (3) 語彙の生成力と多義性のメカニズムの解明。既存の語彙の意味からメタファーやメト

ニミーによって複雑な意味が発生するメカニズムをクオリア構造によって説明した。

(4) 形態構造と統語構造の形態的連続性の解明。テ形動詞+動詞の連鎖や、語プラスと呼ばれる形態単位に基づいて、形態構造と統語構造が境界線を持ちながらも連続体を形成することを明らかにした。

(5) 理論研究の言語学教育への応用。理論研究の成果を社会に還元するため、大学・大学院の言語学教育で使用できるような語彙論・語彙意味論の入門的教材を開発した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 36 件)

- (1) KAGEYAMA TARO. "Isolate: Japanese", Rochelle Lieber and Pavol Štekauer (eds.) *The Oxford Handbook of Compounding* (Oxford University Press), 512-526, 2009 年、査読有
- (2) 影山太郎、「外心構造における意味と形態のミスマッチ」、由本陽子・岸本秀樹編『語彙の文法と意味』（くろしお出版）、25-45、2009 年、査読無
- (3) URA HIROYUKI. "Verbal Nouns in Japanese and Agree in Syntactic Word Formation", 由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の文法と意味』（くろしお出版）、233-252、2009 年、査読無
- (4) 松本 曜、「複合動詞「〜込む」「〜去る」「〜出す」と語彙的複合動詞のタイプ」、由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の文法と意味』（くろしお出版）、175-194、2009 年、査読無
- (5) KISHIMOTO HIDEKI. "On the Formation of Lexicalized Negative Adjectives", 由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の文法と意味』（くろしお出版）、47-64、2009 年、査読無
- (6) 杉岡洋子、「「-中」の多義性-時間をあらかず接辞をめぐる考察-」、由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』（くろしお出版）、85-104、2009 年、査読無
- (7) HOSHI HIROTO and SUGIOKA YOKO. "Agree, Control, and Complex Predicates", H. Hoshi (ed.) *The Dynamics of the Language Faculty* (Kurosio Publishers), 177-202, 2009 年、査読有
- (8) YUMOTO YOKO. "Modularity of Word Formation: Differences between Two Types of Compound Verbs", Hiroto Hoshi (ed.) *The Dynamics of the Language Faculty* (Kurosio Publishers), 203-230, 2009 年、査読有
- (9) 由本陽子、「複合形容詞形成に見る語形成のモジュール性」、由本陽子・岸本秀樹 (編) 『語彙の意味と文法』（くろしお出版）、

209-229、2009年、査読無

(10) 板東美智子、「打撃動詞の多義性—活動表現の「打つ」と感情表現の「打つ」—」、由本陽子・岸本秀樹(編)『語彙の文法と意味』(くろしお出版)、159-174、2009年、査読無

(11) 小林英樹、「漢語サ変動詞の意味・用法の記述的研究—「除去(する)」、「排除(する)」などをめぐって—」、由本陽子・岸本秀樹(編)『語彙の文法と意味』(くろしお出版)、65-84、2009年、査読無

(12) 影山太郎、「属性叙述と語形成」、益岡隆志(編)『叙述類型論』(くろしお出版)、23-43、2008年、査読有

(13) KISHIMOTO HIDEKI. "On Verb Raising", Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.) *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics* (Oxford University Press), 107-140、2008年、査読有

(14) KISHIMOTO HIDEKI. "On the Variability of Negative Scope in Japanese", *Journal of Linguistics*, 44, 379-435、2008年、査読有

(15) KISHIMOTO HIDEKI. "Ditransitive Idioms and Argument Structure", *Journal of East Asian Linguistics*, 17, 141-179、2008年、査読有

(16) 由本陽子、「複合動詞における項の具現—統語的複合と語彙的複合の差異—」、『レキシコンフォーラム』、4、1-30、2008年、査読有

(17) 中谷健太郎、「テクル・テイクの動詞共起制限の派生」、『レキシコンフォーラム』、4、63-89、2008年、査読有

(18) 影山太郎、「辞書情報と結果述語の含意的普遍性」、『レキシコンフォーラム』、3、131-159、2007年、査読有

(19) 影山太郎、「英語結果述語の意味分類と統語構造」、小野尚之(編)『結果構文研究の新視点』(ひつじ書房)、33-65、2007年、査読有

(20) KAGEYAMA TARO. "Explorations in the Conceptual Semantics of Mimetic Verbs", Bjarke Frellesvig, Masayoshi Shibatani, and John C. Smith (eds.) *Current Issues in the History and Structures of Japanese* (Kurosio Publishers), 27-82、2007年、査読有

(21) 岸本秀樹、「場所格交替動詞の多義性と語彙概念構造」、『日本語文法』、7-1、87-108、2007年、査読有

(22) 岸本秀樹、「題目優位言語としての日本語—題目とWh疑問詞の階層位置」、長谷川信子(編)『日本語の主文現象』(ひつじ書房)、25-71、2007年、査読有

(23) 中谷健太郎、「文処理ストラテジーという視点から見た結果構文の類型論」、小野尚之(編)『結果構文研究の新視点』(ひつじ書房)、289-317、2007年、査読有

(24) 影山太郎、「日本語受身文の統語構造」、

『レキシコンフォーラム』、2、179-231、2006年、査読有

(25) 影山太郎、「外項複合語と叙述のタイプ」、益岡隆志・野田尚史・森山卓郎(編)『日本語文法の新地平1:形態・叙述内容編』(くろしお出版)、1-21、2006年、査読無

(26) KAGEYAMA TARO. "Property Description as a Voice Phenomenon", Tasaku Tsunoda and Taro Kageyama (eds.) *Voice and Grammatical Relations* (John Benjamins), 85-114、2006年、査読有

(27) URA HIROYUKI. "A Parametric Syntax of Aspectually Conditioned Split-Ergativity", Alana Jons et al. (eds.) *Ergativity* (Springer), 111-141、2006年、査読有

(28) KISHIMOTO HIDEKI. "Japanese Syntactic Nominalization and VP-internal Syntax", *Lingua*, 116-6, 771-810、2006年、査読有

(29) KISHIMOTO HIDEKI. "On the Existence of Null Complementizers in Syntax", *Linguistic Inquiry*, 37, 339-345、2006年、査読有

(30) 岸本秀樹、「「山盛りのご飯」のゲシュタルトと場所格交替」、『レキシコンフォーラム』、2、235-252、2006年、査読有

(31) 杉岡洋子、「語や接辞の意味が語形成に果たす役割」、『日本語学』、25-6、64-74、2006年、査読無

(32) NAKATANI KENTARO. "Processing Complexity of Complex Predicates: A Case Study in Japanese", *Linguistic Inquiry*, 37, 625-647、2006年、査読有

(33) 小林英樹、「漢語サ変動詞の意味・用法の記述的研究—「救助(する)」、「救出(する)」などをめぐって—」、益岡隆志ほか(編)『日本語文法研究の新地平1:形態・叙述内容編』(くろしお出版)、23-36、2006年、査読無

(34) 影山太郎、「辞書の知識と語用論的知識—語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて—」、『レキシコンフォーラム』、1、65-101、2005年、査読有

(35) SUGIOKA YOKO. "Multiple Mechanisms Underlying Morphological Productivity", E. Francis, S. Mufwene and R. Wheeler (eds.) *Polymorphous Linguistics* (MIT Press), 203-223、2005年、査読有

(36) 由本陽子、「「V+かえる」と「V+直す」の意味と統語」、『日本語文法』、5-2、110-127、2005年、査読有

[学会発表] (計 19 件)

(1) KISHIMOTO HIDEKI, "Argument Structures of Ditransitive Verbs in Japanese", The 18th International Congress of Linguists, 2008年7月21日、Korea University、韓国

(2) KAGEYAMA TARO, 2008.6. “Semantic effects of left-hand elements on right-hand head structure”, 日本言語学会第136回大会シンポジウム “Morphology and Its Neighboring Areas”, 2008年6月22日、学習院大学.

(3) KISHIMOTO HIDEKI, “Subject-raising in Japanese”, The 5th Workshop on Altaic Formal Linguistics, 2008年5月24日、University of London、イギリス

(4) SUGIOKA YOKO. “Nominalization Suffixes in Japanese and the Syntax-Lexicon Interface”